

二〇一九年度 入学試験問題

国語

第三回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) チンパンジーの学習は、ヒトが他人のフリを見て真似るのとは違います。野生チンパンジーがする木の実割り行動の学習を見てみましょう。彼らは

アブラヤシのような硬い木の実を石の上に載せ、もう一つの石でたたき割って中味を取り出して食べる行動を学習し、伝搬させています。さほど難しくなさそうなこの行動も、小さな釘をハンマーで木にまっすぐ打ち込むのに苦労した経験のある方なら、なかなか大変な動作であることに気がつくでしょう。野生のチンパンジーは群れを成して木の実割りをしており、木の実をまだ割れない小さな子どももその中に入って、みんなが割っている様子を興味深げに眺め、ときどき出てきた木の実の中味を親やきょうだいから横取りします。そのうち（これも、何ヵ月もするうち、という意味ですが）自分も石を持ち上げてそれを下に落とそうとしたり、木の実を拾って石の上に載せたりしはじめます。子どもが最終的に自分で木の実を割れるようになるには3年も4年もかかるそうです。それだけの時間、飽きることもなく続けられ、少しずつ木の実割りの行動が形成されていくのです。

その様子を見てみると、チンパンジーはいわゆる木の実割りの「手順」を模倣しているように見えません。硬い木の実の中に食べられるものがあることはわかっていますが、あるチンパンジーは台になる石に木の実を載せてそれを踏んづけてみる、また別のチンパンジーはただ上から石を落としたり地面にたたきつけたりする、仲間たちの行動の一部分は模倣しているようですが、それらを組み合わせると一連の手順として木の実を割るということは「理解」していないようなのです。

これが人間の場合だと、釘を手にとって木に当ててかまえ、**A** ねらいをつけて上からハンマーを打ち下ろすという、その一連の動作をセットで真似しようとするでしょう。それぞれがぎこちなく、ねらいどころをはずして打ちそこねて手にあたって、イタい思いをすることはあるにしても、釘を手でねじ込もうとしたり、釘を持たずにひたすらハンマーを振り下ろすだけの動作を「エンエン」と続けるとは考えられません。人間が他人の行動を真似て何かしようとするとき、私たちはそれを「どのような意図を持ってどうやってやるか」よく見て理解して真似ます。やり方、手順、プロセスを真似るのです。**B** チンパンジーはその行動がもたらす結果を再現しようとはするのですが、やることの意図を察知し、途中のプロセスを追

30

25

20

15

10

5

いかけて真似るといえることができていないようなのです。

この違いをエミュレーション（結果模倣）とイミテーション（意図模倣）といて区別しています。チンパンジーがしているのはエミュレーションであるのに対して、⁽³⁾人間はイミテーションをしているのです。

エミュレーションですから、木の実を割って中味を食べるという行動さえ最終的に再現されればいいので、使われる台石の置き方や、ハンマーとなる石の振り下ろし方などは、個体個体でさまざまです。とてもほかの個体がやっていることを真似しているとは言えません。むしろ個々の動作を組み合わせて一連の手順に仕上げるのは、個体学習、つまり自分自身の「試行錯誤」や「洞察」によってなしているようです。これが「サルは猿真似しない」と言われるゆえんです。意図を理解し手順まで忠実に真似る「猿真似」ができるのは、実は人間だけなのです。

人間の猿真似好きは、**C** 1歳になったばかりの幼児の前で、手で触ると点灯するランプを、わざと頭で触ってつけて見せます。ちょっと面白い動作なので、幼児は喜んでそれを見てくれます。1週間後、こんどは幼児の目の前にそのランプを置いてあげると、その子はその同じ動作をして、頭でランプをつけようとしています。ただランプをつけようとする意図を実現すればいいのなら手で触ればいいのに、わざわざ意味もない頭でつけるという動作を真似するのです。これと同じ実験をチンパンジーでやると、そんなバカなことはせず、手でつけようとしています。これだけ見るとむしろチンパンジーのほうが賢く見えます。人間は意味も考えず、本当に一連の動作をそのまま猿真似をしてしまうのです（これをオーバー・イミテーションと言います）。私たちが「オウオウにして、意味を深く考えることなく、とにかくみんながやっているからというだけの理由で、マニュアルに従って無駄な行動、**D** フゴウリな行動をしてしまうことがあるのも、こうしたオーバー・イミテーションをしてしまう性質を持っているからかもしれません。

D 人間の幼児は、本当に意味もわからず頭でランプをつけるという動作を真似していたのでしょうか。実はこの実験で、あえて両手を縛って自由がきかない姿でランプを頭でつける様子を見せると、そのあと子どもはちゃんと手でランプをつけることができます。そのとき子どもは、「手が自由に使えないから、ランプをつけるという意図」を実現するため、しかたなく頭を使った」ということを理解していたことがわかります。なの

60

55

50

45

40

35

で、自分がやるときは、ランプをつけるという本来の「意図」を実現しようとするわけです。チンパンジーはあくまでもランプをつけるという結果を再現するエミュレーションをしたのに対して、人間はランプをつけるという意図に加えて、手が自由に使えてもわざわざランプを頭でつけるという行為に、わからないけど何か意図があると思って、その手順をイミテーションしたというわけです。

人間の模倣学習にいち早く着目したのはアルバート・バンデューラというカナダの心理学者でした。彼は、オペラント条件づけ理論に基づく学習研究が盛んだった1960年代から、人間の場合、直接強化(きょうか)化学子(けがくし) (報酬・罰)を与えなくとも、他人の行動を観察しているだけで学習が成立することに注目し、社会的学習理論(け)を「トナエました。たとえば大人(おとな)が人形相手に叩いたり投げ飛ばしたりと乱暴な行為をしている様子をビデオで見せられると、それだけで同じように人形に対する乱暴な行動を真似してしまいます。これをモデリングと呼びました。モデリングは、特にモデルが学習者にとって重要な人物だったり魅力的(みりよく)な人物だと、起こりやすいなどといったことが実験で証明されました。

このように同じ「真似る」という学習にもいろいろな種類があることがわかります。そしてヒトの観察学習や模倣学習は独特だと言えるでしょう。人間は教育による学習をする以前に、観察学習や模倣学習の王様なのです。たとえば「空気を読む」というのは、その場に居合(あ)わせた人々が心に抱いているであろう価値観やふさわしい言動をあらかじめ察して、それを模倣してふるまうことができることを意味します。そしてそれができないとKY (空気を読めない)と呼ばれて、密(ひそ)かに批判の対象にされるのです。私たちが読んでいる「空気」は、単にいまここにいる仲間の中の空気だけでなく、社会の空気、時代の空気、世界の空気など、さまざまなレベルに広がっています。

(5) 日本人はなぜ勤勉で礼儀正(よ)しいと外国人から言われるのでしょうか。勤勉さや礼儀作法を家庭や学校で意図的にしつけられることももちろんその理由でしょうが、学校でいくらか訓練されても、一歩学校の外に出ると、大人たちがみんな怠(なま)けていたり、乱暴なふるまいをしていたら、そうした態度は身につきません。それはふだん自分が使っている駅やお店で働いている人たちが、総じて勤勉で礼儀正しくふるまっているのを、意識するとしなやかにかかわらず観察させられており、その結果おのずと模倣してしまっ

ているからだと考えられます。私たちが社会の中で、いろんな人たちと関わりながら生きていかざるを得ない限り、そのような観察学習・模倣学習を、知らず知らずのうちにしてしまっていると言っているといいでしょ。

(安藤寿康『なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える』)

★伝搬(でんぱん)..... 伝わること。

★試行錯誤(しこうさくご)..... 問題に直面したとき、いろいろ試みて失敗をくり返すこと。

★洞察(とうさつ)..... よく見通すこと。

★常軌(じょうき)を逸(い)している..... 普通と思われる範囲(はんい)からはずれている、ということ。

★オペラント条件づけ..... ある自発的な行動に対して報酬(ほうしゅう)を与えることで、その行動を多く行わせること。

問一

——(1)「野生チンパンジーがする木の実割り行動の学習」とありますが、その説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア チンパンジーは硬(かた)い木の実を石を使って割り、割れたからを集める。

イ チンパンジーは群れ全体で木の実割りをしており、小さな子どもも加わっている。

ウ チンパンジーの子どもは、親やきょうだいが割った木の実をもらうだけである。

エ チンパンジーは親やきょうだいに教わりながら、3、4年かけて木の実が割れるようになる。

問二

——(2)「チンパンジーはいわゆる木の実割りの『手順』を模倣(まぼ)しているようには見えませんが」とありますが、では、チンパンジーは、どのような学習によって、木の実割りができるようになりますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問三

——(3)「人間はイミテーションをしている」とありますが、これに関連する44行目以後の、二種類のランプ実験において、幼児はどのようなことをしましたか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四 — (4)「理由」とありますが、これとほぼ同じ意味のひらがな三字の語を文中から抜き出しなさい。

問五 — (5)「日本人はなぜ勤勉で礼儀正しいと外国人から言われるのでしょうか。」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。解答らんんに二行以内で答えなさい。

問六 — A B C D に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使います。)

ア そして イ では ウ しかし エ たとえば

問七 — (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア チンパンジーは、仲間たちの行動を一部分真似まねしているようだが、人間が意図を理解し手順まで忠実に真似るのとは違ちがっている。
- イ チンパンジーは、仲間たちとの活動を通じて石で木の実を割ることはできるようになるが、人間が教えることも割ることはできない。
- ウ 人間は、意味も考えずに、一連の動作をそのまま真似をしがちなので、この点では、チンパンジーを見習わなければならない。
- エ 人間は、幼児期には観察したことをたくみに模倣する能力を持っているが、その後、学習するにつれて、その能力は落ちていく。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。

「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだつてすませたんだろ」

「うん」

恭介はぶつちようづらのまま、しらたきを口いっぱいにはおぼった。

今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねえもん」

女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちえつ、何だよ」

恭介はどすんと席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちえつ、⁽¹⁾ あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」

なんて言う。

「問五、暮林やれ」

がふつうだと思ふ。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えば先生が自分でやってくれることがわかってきた。

「わからないのかあ。問四の応用なだけだなあ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行つて苦労するぞ」

給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かつぼうを着て給食をとりに行く。

⁽²⁾ やつた。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立って、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持って一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうなところを、じゃばつと勢いよくつぐ。なみなみとつがれたとん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

「少しにしてって言ったでしょ」

「せんせーっ、野村さんが好き嫌いです」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなあ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅつと、恭介をにらみつけた。

⁽³⁾ お母さんが、恭介のちゃんわんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

「好き嫌いしていると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらぬよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならパンビデ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にして

は足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあったから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあげた。(4)青い表紙のサイン帖が入っている。ちえつ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベッドに横になった。

中学にいったら生活がかわるだろうなあ、と恭介は思った。勉強だつてしなくちゃいけないし、先生だつて大島みたいなおきなやつじゃないにきまってる。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいかなくなる。クラスのみんなもばらばらになってしまう。あいつなんか私立にいつてしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほつてその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびとか、しまつととか、へっ、トつぽくない、動物だけが住んでるといい。

(5)恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったのだ、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」
先生が言った。

「何の用だと思っう」

「わかりません」

「そうだよな。ずいぶん前のことだし」

「はあ」

「去年の春に、遠足に行ったろ。あとき買い食したのは暮林くんだけじゃないつて、わかってたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかつたね」

「はあ」

「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんと言っておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」

「……はい」

「……はいいいなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱でくつをはきかえなが

95

90

85

80

75

70

65

ら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。

僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいつしよに、アイスクリームを食い食いた。集合の時、僕だけがおこられた。——でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちえつ、大島ともあと一カ月のつきあいだと思うとせいでいい。

大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかつたね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

「あれ」

下駄箱の奥に、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。

「誰のだろう」

A ページをめくり、恭介は B して手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。恭介は、すのこを C けて校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。

家にとびこんで、ただいま、と一声になると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、たんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。

「おもしろくもないや」

声にだしてそう言つて、恭介はノートを机の上に D ほうつた。

その日はそのあとずつと、サイン帖のことが頭をはなれなかつた。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよつて言つたんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこつそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。

ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やつぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもんな。そりゃあ、中学にいけばいいこともあるかもしれない。あいつよりかわいい子がいて、大島よりぼんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だつて、今の僕

125

120

115

110

105

100

130

ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

俺たちに明日はない。暮林恭介

いつか観た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言ってにっこり笑った。机のひきだしにしまっている自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだらうか。恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかあ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まっていた。

(江國香織『僕はジャングルに住みたい』)

問一 — (1) 「あいつも見ていた。」とありますが、この「あいつ」とは誰のことか、なぜ「あいつ」というような呼び方をしたのですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二 — (2) 『やった。とん汁だ』とありますが、恭介がこのように思ったのはなぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問三 — (3) 「お母さんが、恭介のちゃんわんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。」とありますが、このことは、できごとの実際に起こった順序では、どのできごとの後に続いていますか。それにあたる文の最後の五字を抜き出しなさい。(句点を含みます。)

問四 — (4) 「青い表紙のサイン帖」とありますが、これは誰が、何のために用意したのですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五

— (5) 「恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。」とありますが、この場面で恭介の気持ちを最もいらだたせた理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉づかいが男らしくなくはつきりしないこと。

イ 放課後に職員室に呼び出されたこと。

ウ ずいぶん前のことをいまさら持ち出してきたこと。

エ もうじき卒業だからあやまっておきたいといったこと。

問六

— (6) 「目」とありますが、「目」を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 目が高い

二 目がない

三 目から鼻へぬける

四 目くじらを立てる

五 目に余る

【意味】

ア やることがひどすぎて見すごせない。

イ たいそう好きで夢中になる。

ウ よい悪いを見分ける力がすぐれている。

エ 頭の回転が速くて利口である。

オ ささいなことまであれこれと悪くいう。

問七

A ～ D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア びくんと イ ぼんと

ウ がたがたと エ ばらばらと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 恭介は卒業にさみしさを感じていなかったため女の子たちがサイン帖を回していたことを冷ややかな目で見ており、自分は絶対に書かないと考えていた。

イ 担任の大島先生は男らしくなく、授業中も生徒にはつきりとものをいうことができなかつたので、恭介は担任のことを全く信用していなかつた。

ウ 恭介は中学に進学していやな思いをするくらいならば、いつそのこと誰一人住んでいないジャングルに住んだ方がまだましだと思っていた。

エ 小学校を卒業したら野村さんとはなれて暮らし、もう会うことができなくなってしまうことに対して恭介はせつない気持ちになっている。

